

評論 2004年の北海道経済

8月●駒大苫小牧、甲子園を制覇

横島 公司

駒大苫小牧の優勝がもたらしたもの

2004年夏、第86回全国高校野球選手権大会(朝日新聞社、日本高校野球連盟主催)において、南北海道代表・駒澤大学付属苫小牧高等学校が決勝戦に勝ち進み、8月22日、愛媛県代表・済美高等学校との決勝に臨んだ。序盤から点を取り合う息を呑む展開、逆転に次ぐ逆転の末、駒大苫小牧は13-10で済美を破り、念願の初優勝を勝ち取る。北海道勢としては春夏通じて初の栄冠に、北海道は歓喜に酔いしれた。翌23日、新千歳空港に降り立った駒大苫小牧チームは1700人あまりのファンに出迎えられた。さらに24日、札幌の道庁赤レンガ庁舎と苫小牧市役所で開かれた優勝報告会には、7000人を越える人々が押し寄せ、監督、選手たちを熱烈に祝福した。高橋はるみ北海道知事は23日、駒大苫小牧高校に道民栄誉賞を贈呈する意向を固めた。

一般に、高校野球は、冬季の練習を雪などで制約されることがなく、また、いわゆる「名門高」を多く抱える、野球熱の高い地域が強いとされる。これら名門校が地域を越えて中学選手の「青田刈り」を行っていることは周知の事実であり、優秀な素質をもった少年が全国各地から集められ、名門校はさらに強化されるという構造になっている。もちろん、これまで甲子園優勝校が出なかった北海道や東北地方においても有力校は青田刈りを行っているが、集まるのは他地域の名門校の選抜に洩れた選手達がほとんどであり、「外人部隊」である彼らの目標も「甲子園出場」にとどまる傾向がある。こうした高

校球界の現状を踏まえてみると、駒大苫小牧が道内出身者主体のチームで甲子園を勝ち抜いたことは、正に特筆に価する。

また、北海道のチームが負う気候のハンディは、一般に「雪国のハンディ」といわれる冬季の積雪だけではない。あまり注目されることはないが、避暑地としても有名な北海道の涼しく過ごしやすい夏も、夏の北海道代表校の見えない敵となる。夏の甲子園が開かれる時期、近畿地方は猛暑に見舞われ、気温は北海道よりも10度以上高くなることがある。加えて、本州地域独特の湿度は「北海道人」には生来馴染めない性質のものであり、そのハンディは計り知れな

駒大苫小牧 優勝

夏の甲子園
東北以北初、済美下す

駒大苫小牧 13-10 済美

夏の甲子園決勝戦、駒大苫小牧が初の甲子園優勝を達成した。...

『北海道新聞』号外 2004年8月22日付

評論 2004年の北海道経済

い。その証拠に、北海道勢も春の甲子園（選抜高校野球選手権大会）ではこれまでも活躍したことがある。1963年に開かれた第35回大会では準優勝を果たしている。しかし、夏の甲子園では、南北北海道代表の通算成績は49勝124敗であり、夏季の気候のハンディがいかに重いかを物語っている。今回の駒大苫小牧の優勝は、このような北海道の代表校が負う二重の気候のハンディをも克服したものであり、その意味で、真に称えられるべき躍進であった。

「白河越え」の波紋

駒大苫小牧の優勝まで、春夏の甲子園大会で優勝校が出た地域は、1973年夏に江川卓投手擁する作新学院が優勝した栃木県が最北だった。東北勢においては、1969年夏の大会決勝で青森・三沢高校が延長18回引き分け再試合という激闘の末に準優勝を果たすなど、過去に春夏通算7回の準優勝を記録している。しかし、優勝となると、この東北勢すら、80年余に及ぶ高校

球史において、「深紅の大優勝旗」を手にしたことは一度もなかった。そして、東北・北海道勢の越えられないこの壁は、いつしか「白河の関」と称され、白河（福島県）以北の東北・北海道勢のどこが最初に「白河の関」を越えて優勝旗を持ち帰るのかということが、長らく高校野球ファンの大きな関心事となっていた。駒大苫小牧は今回の優勝によって、「白河越えに最初成功した高校」という勲章をも手にしたわけである。

これに対し、頭上を越えて深紅の優勝旗を持っていかれた東北地方では、北海道に先を越された原因の分析が盛んだ。秋田県高等学校野球連盟の佐藤茂理事長は、駒大苫小牧の優勝について、「もう雪国のハンディはなくなってきた」と感想を述べ、秋田経法大学の伊藤護朗氏（秋田経法大学法学部長）は「北海道にはプロ野球も来て、地域全体で野球を盛り上げる気運がある」と指摘した。また、クラブチーム秋田テルサの石崎透氏は、「北海道がなぜ優勝出来たか。情報を集め、学校の枠を越えて強化策を進めることも必要」とコメントしている。

無論、伊藤氏も、北海道日本ハムファイターズが誕生したから駒大苫小牧が優勝できたと言っているわけではあるまい。後述するが、むしろ駒大苫小牧の優勝がファイターズの道民球団としての定着・発展に寄与するという側面のほうが強いといえる。しかし、ファイターズの札幌への移転が北海道の野球界を活性化していることは間違いのないし、駒大苫小牧の躍進を後押しした道内の熱気の下地に北海道の野球熱の盛り上がりがあったこともおそらく事実だろう。

宴のあと

さて、このように駒大苫小牧が歴史的快挙を成し遂げたことは事実であるが、その後の同校野球部に対する道内メディアの注目振りは、そ

駒大苫小牧が優勝
海峡越え、夢の大優勝旗

済	美	230	013	010	10
駒大苫小牧		102	303	31×	13

壮絶な打ち合い制す

全国高校野球選手権大会
北海道代表 駒大苫小牧

【駒大苫小牧】
先発メンバー
(中) 原 井 田
(左) 原 田 田
(右) 原 田 田
(捕) 原 田 田
(一) 原 田 田
(二) 原 田 田
(三) 原 田 田

『朝日新聞』号外 2004年8月22日付

評論 2004年の北海道経済

の規模、継続性とも、異常といわざるを得ない。選手達は一躍スターの如き扱いを受け、駒大苫小牧という存在が一種の社会ブランドになりつつある。如何に道民を感動の渦に巻き込んだ殊勲者たちとはいえ、甲子園はあくまで高校野球という高等学校教育の一課外活動を充実させるための大会である。その意味で、あらゆるプロ競技はもちろん、オリンピックとも同列に扱うことは出来ないはずである。にもかかわらず、新聞は駒大苫小牧野球部の動静を何度も特集し、テレビは彼らの躍動する決勝戦の様相を繰り返し再放送している。このような行いは、結果的に彼らが大衆スターに祭り上げられてしまうことに手を貸すことになる。そこに、取材対象のあり様に対する敬意と配慮は感じられない。

決勝で対戦した済美高の上甲監督は「過去は振り返らない」と言い、全国の強豪校の目は常に「その先」を見据えている。北海道も、すでに過去のものとなった栄光にいつまでも酔いしれてはいけぬ。全道の甲子園を目指す選手たちはつぎに自分たちが輝く舞台を思い描いて日々努力を重ねている。周囲も、いつまでも今回の優勝の余韻に浸ることなく、後に続こうとする彼らを後押しする体制を整えていくべきだろう。そうしなければ、折角の栄冠も一夜の夢物語に終わってしまう。駒大苫小牧の優勝をプロ・アマ問わず、道内野球界全体の発展に有機的につなげていく戦略の構築こそが、今、何よりも求められるのである。その要点は、先ほど紹介した石崎氏のコメントに尽きるだろう。情報を集め、学校の枠を越えた強化策を進めるのである。

今回画期的な優勝を遂げた駒大苫小牧は、当然その功績を評価されなければならない。しかし、今回の優勝によって道内球児の甲子園にかける夢が完結したわけではない。むしろ、それは新たな始まりを迎えたのである。道内マス

ディアも今回の歴史的勝利を単なる慶事に終わらせることなく、それを北海道球界の更なる発展につなげるべく、建設的な議論を醸成することに心を砕かねばなるまい。

様々なハンディを乗り越えて勝ち進んでいく駒大苫小牧の姿は清新なエネルギーに満ち溢れ、道民のみならず多くの人々に共感、感動、勇気を与えた。何よりも、同校の優勝は道内の高校球児や、将来高校球児となって甲子園を目指す子供達に大きな夢と希望を与えた。恐らくこの優勝がなければ、そのような夢を抱くことのでなかった生徒も多くいることだろう。北海道日本ハムファイターズの誕生、新庄選手の加入によって火がつけられた道内の野球熱は、駒大苫小牧の優勝によって一気に沸点まで高まり、ファイターズが西武ライオンズを相手にプレーオフで繰り広げた死闘に道内がかつてない盛り上がりを見せるまでに至った。2004年の北海道球界はすべてが相乗的に良い方向に進み、その中心に駒大苫小牧の壮挙があった。

道産子の子供達は、駒大苫小牧の勇姿に刺激されて野球に興味を持った。将来は高校球児となって甲子園を目指し、さらには「おらが地元のプロ球団」北海道日本ハムファイターズでプレイすることを夢見る子供たちもいるだろう。ファイターズも、少年野球教室などを通じて道内球界の底辺拡大、底上げに積極的に取り組もうとしている。今後もこうした次代への芽生えを大切にしていこう。そうすれば、2004年は、単に高校野球で北海道勢が初の全国制覇を成し遂げた年としてではなく、北海道球界のルネッサンス幕開けの年として永く記憶されることになるだろう。

＜参考文献＞

『北海道新聞』、『朝日新聞』の関連記事。

(大学院経済学研究科研究生)